

# 「漢俳」から「小三行」へ<sup>①</sup>

——中国語俳句の新時代——

秦 嵐  
和泉 ひとみ訳

今天叫今天  
明天來了叫今天  
我被欺騙了

今日は今日

明日来たりても今日と呼ぶ

我騙されたり

これは私が昨年の年末に書いた「小三行」<sup>シャオサンハン</sup>である。時が流れていくのを惜しむ気持ちを書いたものである。

私はもの分かりの悪い子どもだ。実際にはもういい年をした息子の母なのだが、私はそれでもこのように自分を評価している。そう、もの分かりが悪いのだ。たとえば、私も昔、「明日は復た明日」<sup>マタ</sup>（銭福「明日歌」の冒頭の句。銭福は明代の人）を読んだことがあるし、「去りし日は苦だ多し」<sup>タ</sup>（曹操「短歌行」の一句）も読んだことがあるが、それを自分に関連づけて考えて、去りゆく時を惜しむという思いが生じたことは少しもなかった。去年の年末のある日になって、ベッドに横たわって寝ようとしていた時、ふと朝起きる時のような気がした。一種の空虚が心に襲いかかり、私はため息まじりに「一日は本当に早い、すぐに無くなる……」

と言った。そうなのだ、紙にもペンにもまだ触れないうちに、一日は過ぎていってしまうのだ。その日、私はこれにこだわって、考え続けた。「今日はどこに行ってしまうのだろうか。どうやったらそれを見つけれられるのだろうか。寝て起きたらもう明日だ。明日は今日のことなのだろうか。」今日とは、私が生まれた時から勘定して○○○○日目のことなのだと合点がいった時、私は「明日とは別の一日のことだ。今日は本当に無くなってしまふのだ！永遠に戻って来ないのだ！」とわかった。私は昔人が全てのやっつて来る日を「今日」と呼んだ知恵に敬服しつつ、そこから悲しみも湧いてきた。その日、私は涙まで出た。私は涙を流しながら、「一年だってそうだ」、「一生だってそうだ」と思った。そこで、涙にくれつつ上記の小三行を書き、併せて小三行の下に何行かを加えた。書き加えたのは、いずれも自分がやりたいことで、私は残り少ない時を無駄にはしまいと決心をした。そして、自然に眠りに入ったのだった。翌日と翌々日は懸命に頑張つて、両親のことやら、家事、煎じ薬、編集の仕事やらを始末した後、その「何行か」のことをやり、さらにその後は疲れ、終いには只管ベッドに潜り込みたい一心になった……日々はまた過去となり、やっつて来る一日一日はまた「今日」になった。

日々は帰路についたのだから、もう言うのはよそう。だが、ちょうど二日前、この小三行が突然目に飛び込んで来て、私はあの日とあの日の

悲しみや感慨を思い起こした。興味深いのは、この思い出はずっと微笑みを伴っていることだ。そうなのだ、このたった三行の文字によってあの日は思い出深くなり、私の美しい記憶の中に留まっているように思えるのだ。今日それを読者の皆様に話せば、その日は再現されて、共感や交流に繋がっていくかもしれない。

実際には日を留めおく方法はたくさんあり、我が昔人は立德（徳行を積み重ねること）、立功（功績を立てること）、立言（伝えるべき深い言説を作り出すこと）を重んじた。今の人も無謔それを根本に据えているが、手段はずっと科学的で多様化している。身近な友人は思ったことや考えたことを詩で表現しているし、随筆や小説で表す人もいるほか、絵で表す人もいる。そしてそれらを出版したり展示したりして社会に公開している。目下は加えて We Chat（中国の SNS）が広く伝達する助けとなっている。こうした記録や表現のなんと素晴らしいことか。だが、私は怠け者だし、些末な事を身に抱えていることもあって、私には小三行が気楽で簡単でいいと思っている。何か他のことをしながらも、心の中では悩んだり陶酔したりしている時、その中に没入しさえすれば、ちっちゃな三行ができる。決して「立言」するためではなく、そこに生活の中のある瞬間ある瞬間の気持ち記録でき、その一瞬が未来の回想の中でキラキラ輝き出すのが好ましいのである。

「小三行」は、決して私の創り出したものではなく日本の俳句に由来し、中国語では「漢俳」と呼んでいる。俳句は日本の連歌や俳諧の「発句」から独立したもので、詩歌の形式として明治時代に命名したのは正岡子規である。俳句は五音、七音、五音の三句で構成される短詩で、ルールとしては、「季語」と呼ぶ季節に関する言葉や意味あいを含むことが求められる。「季語」は通常、第一句に置かれる。ただ、日本の俳人の句を子細に読むと、季語のないものが少なくないことがわかるだろう。例え

ば、江戸時代の小林一茶には季語のない名句がいくつかあるし、大正時代に生まれた種田山頭火は、すっぱりと季語を捨て去って、気持ちをストリートに詠んだため、人々は彼を「自由律俳人」と呼んだ。

わが中国では、周作人が比較的早くに俳句を紹介した。彼は、俳句は「寥々たる数行の言葉ながら、感情を寄せ意趣を書き、悠然として尽きざる味わいがある」、「翻訳できない」と言う一方で、堪えきれずに松尾芭蕉や与謝蕪村、分けても小林一茶をたくさん訳出した。彼の訳詩は意味を伝えることを重視しており、言葉遣いは自然で清新で、当時の詩壇に短小で清新な詩風を送り込んだ。一九二二年、俞平伯（一九〇〇～一九九〇）。詩人、作家で、『紅樓夢』の研究者でもあった）は『詩』創刊号（一九二二年に朱自清らと創刊）に文を寄せ、俳句を学び、新しいスタイルの詩を創作することを提唱したが、ひとけ人気のない谷に足音だけが響くように、応ずる人は杳としてなかった。一九八〇年に趙朴初氏（一九〇七～二〇〇〇。政治家で仏教界の重鎮。作家としても活躍）は、北海の仿膳舫（北京の北海公園にある仿膳飯荘。清朝の宮廷料理人が開いた茶館をルーツとする宮廷料理レストラン。現在では満漢全席で有名）で日本の俳人協会の中国訪問団を接待し、席上で日本の俳句十七音を参考にしつつ、中国の伝統的な詩歌創作の要素である声調や押韻、韻律に則って三首の短詩を作った。そのうちの一首は「緑蔭今雨來／枝接海花開／和風起漢俳（緑蔭 今雨來たり／枝に海花開くを受く／和風立ち漢俳起きぬ）」というものである。ここに「漢俳」という言い方が見え、朴初老のこの小品は中国詩歌史上初の漢俳ともなった。八十年代初頭には、林や李芒、袁鷹といった多くのベテラン詩人やベテラン翻訳家がある中に参加し、漢俳を書くとともに積極的に俳句を翻訳して、日本の俳人と付き合った。そこで漢俳というこの新しい詩のスタイルは盛んになり、北海の仿膳舫も漢俳の聖地となった。その後、漢俳はチョロチョロ流れ

る小川のように静かに流れを作った。二〇一三年には『中国漢俳百家詩選』（林岫編、線装書局）が出版された。この作品集には、鍾敬文、屠岸、劉徳有、鄒荻帆、鄭民欽など百三十人の七百五十余首の漢俳が収録されており、まことに喜ばしい限りである。

では、「漢俳」をなぜ「小三行」と言うのか。これは詩人の樹才（一九六五〜）。現代詩人。一九九〇年から一九九四年まで外交官として勤務した後、二〇〇〇年から中国社会科学院外国文学研究所に所属。一九八七年から詩の創作を始め、『樹才短詩選』のほか多くの翻訳を手がけている」と関係がある。数年前、樹才は一連の俳句をフランス語から翻訳して私に見せてくれ、それと同時にさらに自分がこの形式をまねて書いた小品を取り出して、私に鑑賞させてくれた。彼は「これは僕が書いた『小三行』。僕はこんなふうを書くのがすごく気に入っているんだ。いっぱい書きたいんだよ」と言った。「小三行」という言い方がスツと私の心に入り込んだ。私は「小三行」のもたらすイメージは、ちっちゃくて、スラリと綺麗な、超俗的な気配を湛えており、それにはいかなる束縛も似つかわしくないと思う。漢俳の現代版として、「小三行」がいい。

周知のように、俳句には五七五の三行十七音が要求され、一句目には季語が入るというルールがある。先輩の漢俳詩人は「和風立ち漢俳起きぬ」という「俳句」のルールを厳守しつつ、大量の優秀な句を創作し、詩歌史上に「大珠小珠」の秀作を提供して貢献した（白居易は「琵琶行」で雨粒が蓮の葉に落ちる様子を大小の真珠に擬えて「大珠小珠玉盤に落つ」と詠んだ）。しかし漢俳については、私は無理に季語を求めない句を特に気に入っている。束縛を捨て去り、自ずとずつと暢びやかになるように思えるからだ。詩人の句が季節に喚起されたのであれば、自然に季語を書くのであって、それはもちろん良い。要するに、こだわって無理強いしない方がいいのだ。

「漢俳」から「小三行」へ

なぜ私は季語に執着しないのか。それは、季語が日本の俳句の中で重視されるのは、そこに深い文化的根源が存在し、決してただルールに従うことによって簡単に模倣できるものではないと思うためである。

日本列島の四季の変化は、はっきりしている。日本人は自然を殊のほか愛し、自然の移り変わりに非常に強烈な感受性を持っている。大自然の変化は日本語の中に点々と描出され、しだいに一群の春夏秋冬を表現する特殊な言葉が形成された。そしてそれが、あたかも我が中国の古典詩歌が典故を使用するように、俳句の季語の拠りどころとなり、日本人の季節に対する認知と共鳴を喚起する言葉ともなった。また同時に、季語は句の内包する含みや緊張感を高めることもできる。当世の日本在住で知日派作家の李長声（一九四九〜）。中国語圏の新聞でエッセイを発表するほか、藤沢周平作品の中国語訳を手がける」はこういつている。「日本では生活から文学まで、いずれも季節感に富んでいる。平安時代の『古今和歌集』では、一部の和歌を春夏秋冬の順に編集しており、草木が萌える春と果実が実る秋が最も多い。俳句は定型の短詩で、最も主要なルールは『季語』である。我々中国人には韻書があり、詩の創作において押韻を重んずる。一方、俳句では季節を如何に表現するかに腐心せねばならず、それ故に『歳時記』というものがあり、何百何千種類の季語を集めて、創作する際に参考にできるようにしている」（公開号『大家』二〇一八年四月四日、李長声「舌の上の日本：三文字で和食がわかる」参照）。確かにこれは紛れもない事実である。しかし、漢俳の創作において俳句の季語の体系を直接横滑りさせるのは、却って問題がある。典型的と思われるひとつの例を挙げよう。

「あけぼの」は俳句の体系の中では「春」の季語で、これは日本の平安時代の女流作家である清少納言の作品に「春はあけぼの」という文言があるからである。この文言はその代表作である『枕草子』に見え、周作

人の訳ではこうである。「春は暁のころ(が最もよい)。しだいに白くなっていく山頂が、少し明るくなってきて、紫色の彩雲が細くそこに横たわっている(のが、おもしろい)」。(清少納言「四時の趣き」、周作人訳『枕草子』一頁。上海人民出版社、二〇一七年六月) この「春はあけぼの」が、四季のいずれにもある「あけぼの」を春の風格を象徴するものであると規定し、春の季語となったのである。中国人の場合、曙光を春の季語として使わねばならないと言ったら、恐らく少なからぬ人が首をかしげるだろう。

さらに思想という面から見ると、日本の神道は自然を尊び、人と自然との融合を提唱する。こうした自然重視の審美的観念の中で、季節的要素の比重は際立っており、完全に生活や行動の細部にまで浸透している。これは典型的な日本の観念と行動の様式である。私の日本における初めての滞在地は北陸の富山市であったが、そのときのことを今も覚えている。ここは医薬品で有名で、魚や海老のおいしさや芳醇で豊富な水や米で褒め称えられているが、京都のような雅とは異なる。私の大家さんは新保さんと言った。新保家にはお姑さんとお嫁さんの二人の未亡人が暮らしているだけだった。嫁と姑二人の生活は、まさしく季節に溶け込んで移り変わっていくとよかつた。お姑さんは七十才前後で、刺繍が好きだった。花の刺繍しかせず、いずれも季節ごとに開花に合わせて刺繍をしていた。私が富山を離れ京都に行ったのはちょうど四月であったが、彼女は記念に春蘭を刺繍してプレゼントしてくれた。お嫁さんは四、五十歳といったところで、毎日、日本女性の典型的な家庭での姿であるエプロンを着けていた。エプロンには大きなポケットがあり、中にはいつも小さなメモ帳と一本のキャップをかぶせた短い鉛筆が入っていた。彼女は落ち葉を掃いては、突然感ずるところがあると、手を止めてメモ帳と鉛筆を取り出して、十七音の俳句を書いた。じつくり考えを巡らせ、その後によくまた箒の音が聞こえたものだった。私は彼女た

ちの家の二階に住んでおり、この嫁と姑の二人は私に多くの驚きと感動をもたらした。日本の古典文化には禅の要素が溢れている。仏教は世界の成立から無になるまでの四劫を重んじ、その影響を受けて日本人は、その世界の移り変わりの中から深遠な意味を悟った。加えてその心の敏感さにより、文化は全体的に表には出さない温厚に傾き、情緒や境地を直接的に表現することはめつたに無く、一般的には含みのある表現を追求した。大自然における四季の榮枯盛衰に感じて悟るという基礎の下、それに託けて自分の様々な心情の変化を暗示した。簡潔で重厚、表現上の利便性がありながら味わいが尽きないといえる。……これにより、季語が俳句に配置されるにはその扱って来るところがあるのであって、季語は簡単に模倣すれば即座に上手に操れるというものではないことが明瞭にわかるだろう。

私はまた二、三年前に、家で俳句の季語に関して交わした会話を思い出した。日本で小学校に通った息子が次のように言ったのである。「僕は季語のはたらきは、まず自然というマクロを照らし出し、それから個人というミクロに入っていくことにあると思うんだ。共鳴するのは感情さ」。この考え方は興味深く、私も触発され、さらに突っ込んで季語の無い俳句について考えた。季語のある俳句の叙景と叙情よって創り出された画面や印象ひいては喚起された悟りは、季語つまりは大自然に導かれたものである。一方、季語の無い俳句を子細に読むと、より多くの作品において、具体的な事物や出来事が興趣を喚起し、感情を引き起こしている。思いや感情は、事物や出来事と結びつき、それらによって触発されるのである。こうした事物や出来事から自然に導き出された感動を詠んだ句は、人の心に受け入れられ易く、さらに俳人の明晰で超俗的な趣きのある表現が加わるのであって、人々の注目を引いて好まれるのは必然的結果といえるだろう。

季語のほか、「五七五」十七音節に関する問題も、しょっちゅう議論になるところである。この問題は、翻訳俳句と漢俳を二手に分けて見なければならぬ。翻訳俳句は五七五の音節を遵守し三句にすることはなかなか困難だ。というのも漢字は一字一音節で、十七個の漢字で包摂されるものは、十七音節の日本語より遙かに大きいため、こうした困難が生じる原因は明白である。実際の翻訳で十七文字の「無理な訳」をした場合、煩瑣になりすぎ俳句の味わいを失ってしまうため、簡潔に意図を伝えることを重視した翻訳が主流となっている。周作人が訳した芭蕉や蕪村、一茶、また李芒〔翻訳家。『世界文学』編集部副主任、中国社会科学院外国文学研究所研究員。翻訳作品に徳永直『太陽のない街』、小林多喜二『不在地主』などがある〕が訳した山頭火は、いずれも十七文字に拘ることなく、行数では二行のものが多くを占め、わかりやすさと俳句の味わいを追求することを重視している。この数年、俳句の翻訳は多くは見られないが、『世界文学』の新刊と近刊号には傅浩氏（一九六三）。中国社会科学院外国文学研究所研究員。中国作家協会会員。詩集『距離』や随筆集『子時』のほか、イギリス詩の研究書を多数執筆）が翻訳した一連の名作の俳句が掲載されている。訳者は「翻訳する際には俳句の句法を真似ればよい。無理やり空白を埋めようとしなければ、俳句の味を伝えられる。スタイルは大方、長短の三行に仕立てれば、韻律が自ずとできあがるのであって、一律に五七五にする『漢俳』のように訳す必要はない」と主張している（『世界文学』二〇一八年第六期、二九三頁参照）。訳してある句も清らかで麗しくまことに喜ばしい。漢俳の創作を見てみよう。漢俳の創作は翻訳に比べると、いつそう五七五にしやすい、ひと世代前の先達の漢俳詩人は基本的に比較的厳格に、初句に季語を入れ十七音節で創作した。だが、実際に漢俳を書くと、時には良い句が閃いたのに、十七文字ではないという問題に悩まされるだろう。このような時に

は字数を増減してルールにぴったり合わせることを追求するのか、それとも時間と労力を費やすばかりで人に好かれない形式の研鑽を放棄して、良い句を留めるのか。私の答えは「良い句へと突っ走れ！」だ。私は、こうした気持ちを書く小品は「小三行」と呼び、「漢俳」としない方が、より若々しく、時代の息吹に富むように思う。

「小三行」は現代生活に取り入れやすい。都市化と現代化の波が押し寄せる中で、私たちは恐らく日本人ほどは季節に敏感ではなく、四季の移り変わりも日本人ほど型どおりに感じはしないが、日常化を重視し、気軽に躍動的な生活の質感を追い求め、一瞬の情緒を表現するというのは、普遍的な欲求である。私たちは「せっかち」な時代―秒速で「連絡」し、秒速で「返信」することを要求する時代、情報が滔々と河のように流れていく時代―に暮らし、「腰を据えて」だの「ゆっくりと」だのはほとんど夢となってしまった。「小三行」は時間も多くはかからないわりには、心の奥底から発せられる感慨を表現できる。そしてそれは、その感慨の瞬間的な抒情と昇華であり、バタバタした中で「心身のちよつとした休息」と言えよう。日本の俳人の中で、小林一茶の俳句は季語に頓着せず、日常的シチュエーションを題材にしてはいるが、叙事は清新で輝きを放ち、情感に真摯なさまが感じられ、詩句は鍛錬されているが、その痕迹が見えない。短く小品であるとはいえ、悲しみは深く私の心を打ち、文学の懐の深さと力を思わせてくれる。私は「小三行」にはこうした俳句の味わいがなければならぬと思う。また俳句の「俳」には、もともと諧謔という意味が含まれているため、「小三行」は悲しみを表現するによし、喜びを表現するによし、諧謔にもよしなのである。

要するに、自由さや瞬間的、手軽で融通がきくこと、憂いや諧謔の表現こそが「小三行」の真髄であり、字数は五七五に拘るのかどうか、押韻はするのかどうかといったことなどに関する問題は、事実上この考え

方に拠るのならば、その答えは明々白々ということになる。即ち、できるだけ素早く正確に心に生じた情感を表現できることを重要事項とし、季語や字数、押韻はいずれも付属的ポジションに置いて、有ればもつといいが、無くても無理強いしない、ということなのである。

実のところ、「小三行」は可愛い友だちのようで、とても簡単に私たちの生活に溶け込んだ上、私たちの生活の雰囲気や質感を良くしてくれ、人生に多彩な句をひとつ又ひとつと残してくれる。

前述の樹才は、意気盛んに「小三行」を書いている。彼は常に「小三行」によって生活を記録している。昨年の盛夏に詩人たちと伊春〔黒竜江省東北部に位置する市〕に行き、詩会〔詩人が一堂に会し、詩を創作したり朗読したりする会〕の期間中に伊春の風物を描写した句をたくさん書いた。ここに二首を取り上げて愛でたい。

藍莓釀新酒

惹得才郎頻舉杯

伊春好滋味

ブルーベリー新しき酒釀しだし

しきりに誘ふ 才子の杯

伊春の良き味

美溪牧牛羊

湯旺河上花大姐

俳詩做錦裳

美しき谷に飼ひたり 牛羊うしひつじ

湯旺河畔の テントウ虫

俳句もて錦の裳としたまひぬ

〔湯旺河は伊春を南北に流れるアムール川水系の河川〕

後の一句は、詩人たちが皆で創った句ということである。詩会の期間中、詩人たちは時ならず口をついて「小三行」を披露したといい、その頓智や諧謔もまた楽しい。「小三行」を書くことは、樹才にとつてはもう一種の習慣となっており、何かことを目にしては、三行がまずできるのである。例えばこんな具合である。去年の年末、編集部のことだった。私の席は入り口に近く、寒気が時として入ってきて、高興編集長と同僚たちは寒がりの私に窓際の場所に移るように勧めてくれた。自分が寒さを避けるために人に座ってもらうのは嫌で、私が承知するはずもなかった。ちょうど座先移動を断っている最中に、樹才がやって来て「この本棚に短い詩を貼ればいいんだよ」と言った。

姐姐好怕冷

風兒啊

請你繞路行

姉さまは寒きを恐る

風よ風 回り道して

行きたまへ

短い「小三行」には、詩心が溢れて暖かく、私たちはすぐに風はきつと感ずるところがあつて回り道してくれると思つたものだった。

同好の士はあるものだ。民俗学の専門家である劉魁立氏（一九三四〜）。

中国社会科学院民族文学研究所研究員、所長。『劉魁立民俗学論集』をはじめ多くの著書がある」も「小三行」とすぐに親しくなった人で、頭の白髪や眼前の美食、重陽節の落葉などを全部「小三行」に入れ、いい景色を見て心に感ずるところがあれば、やはり口で詠んだり書きつけたりする。去年の秋、ご老体が天台の石梁鎮から「小三行」を送ってくれたのを読んだ。

和合大道場

静心歸處在石梁

宝刹称方廣

寒山拾得法会の場

静かな心帰るは天台石梁鎮

名利称す方広と

彼の弟子たちはしょっちゅう君の三行はどうだ、私の三行はどうだとグループで語り、We Chatで「小三行」を披露しあっている。春園女史は次の句で劉先生に答えた。

聽濤在石梁

五百羅漢大道場

寄心在方廣

波聞きて石梁にあり

五百羅漢の大法会

心寄せたる方広かな

〔方広寺は浙江省天台県石梁鎮にある仏教寺院。前身は南朝陳の宣帝の太建五年に智者大師が宿泊した「石橋庵」で、北宋の徽宗の御代に焼失したが南宋の光宗の紹熙年間に再建されたという。寺は上方広寺、中方広寺、下方広寺に分かれ、下方広寺には五百羅漢殿があり、五百体の羅漢像が配置されている。天台山には奇山異水があるため、釈迦の弟子であった五百羅漢が度々訪れ、衆生を済度したという〕

一種の短詩の形式での表現は、少しでも思いを巡らせると、多くの望外の喜びを得られる。

各人の生活では私たちは一人で多くの役割を担っている。例えば私なら、娘であり、母親であり、妻であり、姉であり、友人であり、編集者であり……それぞれの年齢で、私たちの役割は担うべき重さが異なり、時には疲労困憊したり意気阻喪したりするのに、休むことができず、憂さを晴らすことができないときがある。どうしたものか。何のより良い方法も無いのであれば、担うべきものは担わねばならない。大上段に構えた立派な道理は、具体的な困難には役に立たない。でも、私たちは適切に自分の感情を調節できれば、意気阻喪に少しの詩的興趣を加えられるし、疲れて何もしたくない中にも幾ばくか気持ち奮い立たせるものを流し込めるのである。「小三行」は本当に私をよく助けてくれた。

豈我一人呆

哈哈哈哈哈

鄰家鍋糊啦

豈に我ひとり阿呆ならん

ハハハハハハハ

お隣さん 鍋を焦がしたるかな

続けざまに鍋を焦げつかせてしょんぼりしていた私だが、この句で明るくなった。それに、その後にもまた焦げつかせた時にも、いつもこの句を思い出しては、莞爾として微笑む。

百望山前樓

才女倚窗詩句亂

原來沒梳頭

百望山前 高き樓

才女窓辺に寄りて詩句亂る

思わざりき梳らざるとは

何もやりたくなくて、頭が整理できない日。(才女は自嘲を込めたもの)

〔百望山森林公園は北京市内頤和園の北3キロメートルのところの位置する〕

六六、六六啊

生出一副大翅膀

飛躍北四環

六六、六六や

大きな翼生やしたまへ

北四環を跳び越えん

酷い渋滞のとき。(六六は私の車を指す)

太陽起得早

幹了許多活

現在來叫我

お日さまはお目覚め早し

たくさんしごとをしたまひぬ

今は我をば起こしたり

頭痛のため爆睡し、翌日に太陽の光で起こされた後の句。痛みの無くなつた幸せなお昼だった。

秋風啊

這些葉子去哪裡

急也匆匆地

秋風や

この葉っぱらはどこへ行く

慌てふためき いそいそと

秋風が落葉を巻き上げるころになると、いつも私は人生のようだと思ふ。

細柳葉初展

青青小枝戲風愁

皓首人痴看

細き柳葉初めて開く

青き小枝風に戯れ天真爛漫

見惚れるは髪白き人

春の光の中の柔らかい柳と老人。

跛脚的驢子

也配上了鞍

啊、創新工程

びっこのロバ

それでも着けたり鞍ひとつ

ああ イノベーショナルプロジェクト

びっこのロバとは自分をなぞらえたもの。

舊雨滴紅豆

霧滿京城春猶在

伊人此日生

古き雨小豆に滴る

霧に覆はる洛内に春は猶ほ在り

かの人はこの日に生まる

遠くに行った友人を思つて。

「舊雨」は杜甫の「秋述」文に見える言葉で、古くからの親友を言う。

「紅豆」は遠くに離れてしまった友人を象徴する表現。王維「相思」詩の「紅豆南国に生じ、秋来たりて故枝発す。君に勧む 采擷を休めよ。此の物最も相思せしむ」にもとづく。王維は安史の乱の際に江南で流浪生活を送っている旧友の李龜年を思い、この詩を書いたという。小川環樹・都留春雄・入谷仙介選訳『王維詩集』（岩波文庫、一九七二年）参照）

紅紅的石榴

呵呵呵開口笑啊

莊莊做新娘

真つ赤なざくろ

ははははと口を開けて笑ひたり

花嫁となりぬ 莊莊ちゃん

同僚のお嬢さんが結婚した時の慶賀の句。

何年も前に俳人の松尾芭蕉のものをちよつと訳したことがあった。特に好きな段落をここに引用しておこう。

「日月は百代の過客であり、流れゆく年月は行ったりきたりして、また旅人のようである。船頭は生涯にわたって筏を水に浮かべ、馬子は轡を引いて老いていくものだが、そこで日々旅をして他郷に身を寄せている者は、旅こそを住処としている。昔人で旅路にて亡くなった人はどのぐらいになるのかわからぬほどだ。余もいつの頃からかわからぬが、一片

の雲や一陣の風に誘われて、漂白の気持ちを抑え難くなった……」（『おくの細道』序文、拙訳による）

そうだ、私たちはみな、いのちの旅の中の旅人なのだ。たくさんの始まりがあり、たくさんの遠くへの憧れがあり、たくさんの未知からの誘惑がある。「小三行」という、この日本由来の文学形式は、文学の世界ではまだ小さな小さな新メンバーだ。だが、彼女はあなたが身を委ねて恋々とするに値する世界であり、彼女はあなたが始めるのを待っている。彼女は喜んであなたの未知への憧れを詰め込み、あなたの快楽に付き添い、あなたの痛みを慰める……。 「小三行」はいつでもあなたの生活を「アート」にしてくれる。即ち、あなたの日々を描写し、あなたの身近な出来事を点描する。細々とした些細なことや、苦しみも悲しみも喜びも、大小にかかわらず、あるがまま思いつきでいい。

戊戌の年（二〇一八）の新年、安らかな夜に、友人と私の好きな「小三行」についておしゃべりをした。心はこんなにも安らかで、喜びと祈りを帯びている。みなさんには聞こえただろうか。

過年喜洋洋

爲文勸作、小三行、

指間有餘香

新しき 年ぞ愛でたき

文を綴りて勸むるものは「小三行」  
指間に残る余香かな

二〇一七年十二月初稿

二〇一八年十一月底改定

#### 注

① この文は、二〇一八年の新年にあたって『世界文学』（中国社会科学院外国文学研究所『世界文学』編集部による隔月刊の出版物）の読者に向けて書いた「小三行」漢俳というアートからの招待」をもとに増改訂したものである。拙文は漢俳の今日における形式的革新の問題を論ずることを主旨としている。読者の参考に資することを願う。

（中国社会科学院外国文学研究所編審、『世界文学』副主編）